

ヨブ記29-31章「自分の義の主張」

1A 過去の栄光 29

1B 天幕におられる神 1-10

2B 貧しい者につく義 11-20

3B 戻らない慰めの言葉 21-25

2B 今の蔑み 30

1C 痴れ者の子 1-15

2C 肉体の蝕み 16-23

3C 善に対する悪 24-31

3B 歩みの数 31

1C 天幕の中 1-15

2C 寄る辺のない者 16-28

3C 敵に対する親切 29-40

2A 神を不義とすることへの怒り 32

本文

ヨブ記 29 章を開いてください。私たちは、ヨブの最終弁論を読むこととなります。前回、ビルダデが語ったのは 25 章でたった 6 節、それからヨブは圧倒的な知識をもってビルダデの主張を凌駕しました。彼らは、知識は持っていたけれども、人を慰めることはありませんでした。その知識をもってヨブを痛めつけましたが、ヨブは以前、人々を慰める働きを行っていました。彼ら三人よりも知識を持っていたにも関わらず、ヨブはその知識は愛による建徳のために使うものであることを知っていたのです。「知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。(1コリント 8:1)」とある通りです。

そしてヨブは、知恵について話しました。人は宝石を得るべく、とてつもない情熱を注ぐことができ、その技術は圧倒されるほどですが、しかしどのように生きるべきか、その知恵を得ることはできません。ゆえに、知識はあっても愚かなことを行なうのです。ヨブは、天地を造られた神はあらゆる知識を持っておられ、その知識の中で命令を私たちに与えておられるのだから、「主を恐れること、これこそが知恵である。」と結論づけたのです。

1A 自分の義の主張 29-31

この時点で、友人三人は何一つ話すことができなくなりました。ヨブの^{どくせんじょう}独擅場になります。彼自身、この最後の格言によって自分の主張を言い尽くすことができます。29 章でヨブは、自分の過去の栄光について語ります。しかし 30 章で、今の卑しめられた状態について語ります。過去がそうであったのに、なぜ現在はこうなっているのか？という根源的な問いかけです。友人たちは、それが、彼が行った悪のせいだとしました。しかし、決してそうではないことを彼は 31 章で論証します。

「過去はこうであったのに、なぜ今はこうなのか？」という問いかけは、私たち人間であれば、この地上に生きているかぎり心に浮かんでくるものです。そこに因果関係があるのか？何の原因があるのか？もちろん、自分の罪や過ちによって今の自分がいることもあります。しかしヨブのように、その原因が自分の側に全くないのに苦しみが起きているのはなぜか？ということです。このことを考えながら読んでいきたいと思えます。

1B 過去の栄光 29

1C 天幕におられる神 1-10

29:1 ヨブはまた、自分の格言を取り上げて言った。29:2 ああ、できれば、私は、昔の月日のようであったらよいのに。神が私を守ってくださった日々のごようであったらよいのに。29:3 あのとき、神のとしびが私の頭を照らし、その光によって私はやみを歩いた。29:4 私がまだ壮年であったころ、神は天幕の私に語りかけてくださった。29:5 全能者がまだ私とともにおられたとき、私の子どもたちは、私の回りにいた。

ヨブは、1章における自分の日々のことを思い出しています。彼のその時の姿は、「神が私を守ってくださった」ということです。また、神の灯が自分の頭にありました。そして天幕の中では神が、語りかけてくださいました。神との交わりが、その生活の特徴でありました。そして、ヨブは、「その光によって私はやみを歩いた」と言っています。ヨブが生きていた時代にも、もちろん悪がはびこり、不正が行われていた世界でありました。そのような世界に生きていても、神が頭を照らしてくださったので、光の中で歩むことができたということです。

29:6 あのとき、私の足跡は乳で洗われ、岩は私に油の流れを注ぎ出してくれたのに。

「乳」は凝乳のこと、バターのようなものです。そして油はオリーブ油のことです。どちらも、恵みと豊かさを表すことばであります。イスラエルの約束の地が、「乳と蜜の流れる地」という表現もこれと同じ意味合いを持ちます。

29:7 私は町の門に出て行き、私のすわる所を広場に設けた。29:8 若者たちは私を見て身をひき、年老いた者も起き上がって立った。29:9 つかさたちは黙ってしまい、手を口に当てていた。29:10 首長たちの声もひそまり、その舌は上あごについた。

「町の門」とは、旧約聖書に数多く出てくる所です。なぜなら、門のところで行政や裁判が行われており、そこは町のつかさが集まるところだからです。ヨブは族長でありましたが、その役人でさえが一言も語るができないほどの、大きな権威が与えられていました。その権威は、強いられるのではなく、神から賦与された、彼らの深い尊敬から来る自発的なものです。ヨブと比べたら本人が天から怒るかもしれませんが、牧者チャック・スミスがそのような人でした。彼が説教壇に上がると、会堂が一気に静まりかえります。それは自分の教会の会衆だけでなく、全世界から集

まってきた牧師たちの会議においても同じです。神から与えられた権威です、一人一人に与えられた深い尊敬であります。

2C 貧しい者につく義 11-20

29:11 私について聞いた耳は、私を賞賛し、私を見た目は、それをあかした。29:12 それは私が、助けを叫び求める貧しい者を助け出し、身寄りのないみなしごを助け出したからだ。29:13 死にかかっている者の祝福が私に届き、やもめの心を私は喜ばせた。29:14 私は義をまとい、義は私をおおった。私の公義は上着であり、かぶり物であった。29:15 私は盲人の目となり、足なえの足となった。29:16 私は貧しい者の父であり、見知らぬ者の訴訟を調べてやった。29:17 私はまた、不正をする者のあごを砕き、その歯の間から獲物を引き抜いた。

ここに、なぜヨブのところに権威が与えられたのか、人々を黙らせるほどの口を持つことができたのかの理由が書かれています。それは、貧しい者、弱い人たちを助けたからだということです。貧しい人々に対して自分が福音となる、良い知らせとなることによって、そこに正義があり、その正義によって彼は力を持っていました。友人たちは、ヨブが貧しい者たちを虐げていると告発しましたが(22:5-9)、それはとんでもない話であり、ヨブはこれらのことを行なっていました。

29:18 そこで私は考えた。私は私の巣とともに息絶えるが、不死鳥のように、私は日をふやそう。29:19 私の根は水に向かって根を張り、夜露が私の枝に宿ろう。29:20 私の栄光は私とともに新しくなり、私の弓は私の手で次々に矢を放つ。

貧しい者と共に生きることによって、ヨブの力と栄光が勢いを増し、そして自分の命も引き伸ばされているということを彼は実感していました。まさにヨブの生き方は、キリストご自身の福音を示しています。「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしは彼の上にわたしの霊を授け、彼は国々に公義をもたらす。彼は叫ばず、声をあげず、ちまたにその声を聞かせない。彼はいたんだ葦を折ることもなく、くすぶる燈心を消すこともなく、まことをもって公義をもたらす。彼は衰えず、くじけない。ついには、地に公義を打ち立てる。鳥々も、そのおしえを待ち望む。(イザヤ 42:1-4)」主は、痛んだ者たちと共におられました。その力を弱った者たちに用いられました。それが彼の義であり、それゆえ世界の隅々までキリストの力が及ぶように広がっていく、というものです。

神は、このような形で私たちにも力を与えてくださいます。聖霊の力は、キリストの福音によって現れます。弱い者、愚かな者、取るに足りない者、貧しい者と共にいることによって、そこに愛と情熱を注ぐことによって力を上から帯させてくださるのです。そこには、ヨブと同じように自分自身ではなく、主ご自身が油注ぎを与え、恵みの豊かさの中でその周囲を満たしてくださるのです。

3C 戻らない慰めの言葉 21-25

29:21 人々は、私に聞き入って待ち、私の意見にも黙っていた。29:22 私が言ったあとでも言い返さず、私の話は彼らの上に降り注いだ。29:23 彼らは雨を待つように私を待ち、後の雨を待つように彼らは口を大きくあけて待った。29:24 私が彼らにほほえみかけても、彼らはそれを信じることができなかった。私の顔の光はかげらなかった。29:25 私は彼らの道を選んでやり、首長として座に着いた。また、王として軍勢とともに住まい、しかも、嘆く者を慰める者のようであった。

彼らに語りかける慰めの言葉であります。その言葉によって、実に多くの慰めを受けて、それを聞いている人々は議論することなど毛頭考えておらず、そのまま水のように飲みほし受け入れています。そして、まさに自分自身に気にかけてくれているのかと驚き、そのヨブの微笑みを素直に受けとめられないという程、彼に威厳があったということです。そして、彼は族長の身でありながら、首長を選ぶような働きもし、王のように力を持っていました。

2B 今の蔑み 30

1C 痴れ者の子 1-15

30:1 しかし今は、私よりも若い者たちが、私をあざ笑う。彼らの父は、私が軽く見て、私の群れの番犬とともにいさせたものだ。

「しかし今は」あるいは、「だが今は」であります。これまでと状況が一変しましたのです。ヨブのところにいる、最も卑しい小僧ども、餓鬼どもまでが自分をあざ笑っているという状態です。彼らの父というのは、羊の群れの番犬と同じような忌まわしい者であったとヨブは言っています。私たちにも、このような状況の変化がありますね。これまで平穩であったのが、突如として災いが降りかかることがあります。

30:2 彼らの手の力も私に何の役に立とうか。彼らから気力が消え失せた。30:3 彼らは欠乏とききんでやつれ、荒れ果てた廃墟の暗やみで砂漠をかじる。30:4 彼らはやぶの中のおかひじきを摘み、えにしだの根を彼らの食物とする。30:5 彼らは世間から追い出され、人々は盗人を追うように、彼らに大声で叫ぶ。30:6 彼らは谷の斜面や、土や岩の穴に住み、30:7 やぶの中でつづやき、いらくさの下に群がる。30:8 彼らはしれ者の子たち、つまらぬ者の子たち、国からむちでたたき出された者たちだ。

この若者たちは、まるで獣のようにして生きていた者たちです。盗みも行なっていました。そして、7 節にあるつづやきや群がりというのは、性行為のことを意味するという解釈もあります。つまり、不道徳で悪さをし、社会から追い出さなければいけないような痴れ者だということです。

30:9 それなのに、今や、私は彼らのあざけりの歌となり、その笑いぐさとなっている。30:10 彼らは私を忌みきらって、私から遠ざかり、私の顔に情け容赦もなくつばきを吐きかける。30:11 神が

私の綱を解いて、私を悩まされたので、彼らも手綱を私の前に投げ捨てた。

このような悪童が、歌をうたってヨブを嘲り、笑っていました。そして唾をかけています。唾をかけることは、相手に対する相当な侮辱です。ここにある「綱」というのは、神が制御してくださっている守りではありますが、彼らの方もヨブに対して控えていたもの、その制御していたものが解けて彼をいじめているのでした。

30:12 この悪童どもは、私の右手に立ち、私の足をもつれさせ、私に向かって滅びの道を築いた。

30:13 彼らは私の通り道をこわし、私の滅びを押し進める。だれも彼らを押し止める者はいない。

30:14 彼らは、広い破れ口からはいつて来るように、あらしの中を押し寄せて来る。30:15 恐怖が私にふりかかり、私の威厳を、あの風のように追い立てる。私の繁栄は雨雲のように過ぎ去った。

これは、自分が受けている仕打ちを、包囲された町のように形容しています。通り道を壊した、広い破れ口から入ってきた。そして嵐が起こっているように形容します。事実、物理的にも風が吹いて息子の家が壊れ、それで息子と娘十人が死にました。ですからヨブにとって、この災いが降りかかってときに最も苦しかったことの一つ、過去と今を比べての状況の変化で大きかったのは、人の変わり様でありました。私たちもそうではないでしょうか、何か自分に事が起こったら、これまで親しくしてくれていた人が急によそよそしくしたり、冷たくなったりすること、これがなぜだろうと悩んだことがあるかと思います。

ダビデもこのことを経験しました。人から見捨てられ、友からも見捨てられることをダビデはこのように詩篇で歌いました。「私の敵は、私の悪口を言います。「いつ、彼は死に、その名は滅びるのだろうか。」たとい、人が見舞いに来ても、その人はうそを言い、その心のうちでは、悪意をたくわえ、外に出ては、それを言いふらす。私を憎む者はみな、私について共にささやき、私に対して、悪をたくらむ。「邪悪なものが、彼に取りついている。彼が床に着いたからには、もう二度と起き上がれまい。」私が信頼し、私のパンを食べた親しい友までが、私にそむいて、かかとを上げた。(41:5-9)」ここ最後の文は、パンを食べている時にイエスを裏切った、イスカリオテのユダのことを預言している言葉です。ヨブの苦しみ、また人の持つ苦しみをそのまま受けるために来られたのが、私たちの救い主、イエス・キリストです。

2C 肉体の蝕み 16-23

30:16 今、私は心を自分に注ぐ。悩みの日に私は捕えられた。30:17 夜は私の骨を私からえぐりとり、私をむしばむものは、休まない。30:18 それは大きな力で、私の着物に姿を変え、まるで長服のように私に巻きついている。30:19 神は私を泥の中に投げ込み、私はちりや灰のようになった。

これはヨブがかかっている皮膚病の姿を描いています。これが象皮病ではないかと言われている

ます。この病は骨に激痛が走るそうです。寝ている時にその痛みが走るとのこと。それから、関節が外れるということもあります。したがって、このヨブの表現を読んで象皮病ではないかと言われている。そして、彼はその痛みを、神から見放されたもののように感じています。

ヨブの独白を読みますと、これもまたキリストがこの苦しみをお受けになったことが分かります。「私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。私の力は、土器のかけらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついてあります。あなたは私を死のちりの上に置かれます。(詩篇 22:14-15)」キリストが十字架に付けられた時に、それは私たちの罪の刑罰を受けられていただけでなく、ヨブもまたすべての人も、それぞれが受けていた病をもその上に負われていたことを思います。

30:20 私はあなたに向かって叫びますが、あなたはお答えになりません。私が立っていても、あなたは私に目を留めてくださいません。30:21 あなたは、私にとって、残酷な方に変われ、御手の力で、私を攻めたてられます。30:22 あなたは私を吹き上げて風に乗せ、すぐれた知性で、私をきりもみにされます。30:23 私は知っています、あなたは私を死に帰らせ、すべての生き物の集まる家に帰らせることを。

ヨブにとっての苦しみは、ここ、神からの答えがないということで頂点に達しているでしょう。彼の過去は、神が自分と共におられ、天幕におられたところから始まっています。彼は、一日のうちにすべての財産を失い、息子と娘を失っても、まだその確信は揺らいでいませんでした。皮膚病を患って、その苦しみの中にあつて「神はどこにおられるのか？」という疑問が出てきたのです。ただ自分を風で翻弄させ、最後は生物が死んでいる国に帰らせるのだという不条理を嘆いています。

これは、信仰者にとってとてつもなく大きな苦しみです。神との歩みを行っている中で、苦しみを受ければ当然、神に対して「なぜですか？」という問いかけをします。ところが、その答えがありません。ホロコーストの苦しみによって、多くのユダヤ人が無神論者になったと言われています。神がおられるはずがない、と断じたのです。しかし、同じナチス政権において、ユダヤ人ではないですがナチスとヒトラーに抵抗して、逮捕され、処刑された牧師がいます。ボンヘッフアーという人ですが、彼がこう言いました。「神の前に、神と共に、神なしに生きる。」神と共に生きようとしながら、なおのこと神なしに生かされているような苦しみを味わう、ということでもあります。¹

このことを聖書に出てくる聖徒たちは、この孤独を味わっています。ヨセフがその典型でしょう。創世記にある彼の生涯には、主が彼と共におられたという言葉が書いてあるのですが、なぜか彼は牢屋に入れられ、それから献酌官がパロにヨセフのことを言うのを忘れてしまったばかりに、さらに二年間そこに入っていたという経験をしました。そこに主がおられると感ぜられるはずがありま

¹ <http://www2.plala.or.jp/Arakawa/job38.htm>

せん。ダビデもそうでした。主が彼と共におられて、ペリシテ人に対して大勝利を治めていたのに、サウルに負われる身となり、彼の魂の飢え渴きはエルサレムで主のところでは思いにふけること、また主への祭りの列に交じりたいことなどでした。

そして何よりも、神に祈っているのにその答えがないという、神がおられるのにおられないような体験をした方はイエス様ご自身です。「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも、わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたは答えになりません。夜も、私は黙っていられません。(詩篇 22:1-2)」

3C 善に対する悪 24-31

30:24 それでも、廃墟の中で人は手を差し伸べないだろうか。その衰えているとき、助けを叫ばないだろうか。30:25 私は不運な人のために泣かなかっただろうか。私のたましいは貧しい者のために悲しまなかっただろうか。30:26 私が善を望んだのに、悪が来、光を待ち望んだのに、暗やみが来た。

人でさえ、苦しみの中で、衰えている中で助けを差し伸べるのに、神は私に助けを差し伸べてくださらないのか、と訴えています。自分自身、不運の人のため、貧しい人のために悲しんだことがある。けれども、神は悲しまれないのか？と言っているのです。ここが後で、エリフによって非難されることとなります。神よりも自分自身を義としているエリフは、ヨブの言葉を聞いて思いました。

そして、「私が善を望んだのに、悪が来、光を待ち望んだのに、暗やみが来た。」と言っています。彼は善を行ってきました。貧しい人々を助けました。またかばいました。これらの善に対する報いが、悪だったというものです。そして当初は、闇の中で光がありました。神の光の中でヨブは歩んでいました。ところがやって来たのは自分自身に対する闇です。善に対する報いは善のほうではないか、そして光に対する報いは光なのではないか。ところが、その反対になってしまいました。

30:27 私のはらわたは、休みなく煮えたぎる。悩みの日が私に立ち向かっている。30:28 私は、日にも当たらず、泣き悲しんで歩き回り、つどいの中に立って助けを叫び求める。30:29 私はジャッカル兄弟となり、だちょうの仲間となった。30:30 私の皮膚は黒ずんではげ落ち、骨は熱で焼けている。30:31 私の立琴は喪のためとなり、私の笛は泣き悲しむ声となった。

肉体の苦痛、人々から見捨てられた苦痛、そしてただ死を待つのみになってしまったと嘆いています。

私は 30 章を読んで、29 章を読んだ時と同じものを感じました。それは、まさにイエスご自身が受けられた苦難であります。29 章においては、貧しき者の受け継ぐ神の国を現されたキリストの姿を見ました。しかしここ 30 章では、人々から見捨てられ、肉体の苦痛を受け、そして神からも見捨て

られたイエス様の姿を見ます。つまり、ここからヨブはキリストの苦しみにあずかっているということが言うことができます。反対に、キリストがヨブのような人が受けている不条理と苦しみをその贖いの生活においてすべて受けてくださったとも言えるでしょう。ヨブが、永遠の命そのものであるキリストのご自身にあずかるため、神がキリストにおいてこの被造物と一つになり苦しまれることについて、ヨブは証しているのです。

ヨブに対して友人は、正義の議論しかしませんでした。そこには愛がありませんでした。論理の整合性はありましたが、愛というのはその苦しみに共感するものであり、その現実から出てくる言葉は合理的ではありません。ヨブは、このことを彼らに詰っていました。ところが、実はヨブ自身も、正義をとことんまで追及していった、そのために愛という要素を忘れていました。

元を正すと、神がヨブにこの苦しみを許されたのは、ヨブのことを愛していたからです。神は、ヨブが自分のしもべであると、サタンに自慢されたほどでした。そして、いかに潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっているかを自慢されていました。そこでサタンが、彼はいたずらに神を恐れているのではないと挑んだのです。その挑戦に対して、ヨブであればこの苦痛に耐えられるという自信があったのです。ヨブを信頼し、ヨブであれば耐え抜くであろうと見越して、それでサタンの試しを許されたのでした。悪魔のヨブに対する中傷に対して、神は彼の名誉を守るために、この試練を与えられたのです。

私たちの生きている社会は不条理に満ちています。アダムが罪を犯して以来、そうなのです。しかし神は、この不条理の世界だからこそ愛という原理によって働いておられます。ヨブが苦しむのは、彼が憎いからではなく、むしろそれだけの期待をかけているという愛によるものであるように、愛というのは実に不思議であり、頭の理解で捉えどころのないものなのです。愛ほど、一定の法則がなく、一言で言い表せないものはないでしょう。しかし、愛しているということは分かるのです。神が私たちを愛し、そして互いに私たちが愛し合っているというのは分かるのです。これが私たちの実存を支えているのです。

3B 歩みの数 31

しかし、ヨブはそのことは分かりません。彼は 31 章にて、一気に自分の義について話します。神が私を苦しめ不条理なことをしているが、私は堂々と神の前で自分の潔白さを証明できると宣言します。ここにねじれ現象が起こります。神が不義とされ、自分を義とするというねじれ現象です。このことを後でエリフが怒るのです。

1C 天幕の中 1-15

31:1 私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を留めよう。31:2 神が上から分けてくださる分け前は何か。全能者が高い所から下さる相続財産は何か。31:3 不正をする者にはわざわざいが、不法を行なう者には災難が来るのではないか。31:4 神は私の道を見られないのだろうか。

私の歩みをことごとく数えられないのだろうか。

ヨブはこれから、十二の潔白を証明していきます。ここにあるのは、性的誘惑です。これが一つ目です。二つ目は嘘をつくこと、5-6 節にあります。三つ目は貪りです、7-8 節です。9-12 節に四つ目、姦淫の罪があります。五つ目は、被雇用者の人権で 13-15 節にあります。六つ目以降はその後に話します。

初めの情欲についてですが、彼は、「私は自分の目と契約を結んだ。どうしておとめに目を留めよう。」と言いました。これはすごいことです。イエス様が言われた言葉を思い出します。「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。もし、右の目が、あなたをつまづかせるなら、えぐり出して、捨ててしまいなさい。からだの一部を失っても、からだ全体ゲヘナに投げ込まれるよりは、よいからです。(マタイ 5:28-29)」

イエス様の言われる、「抉り出してしまいなさい」というのはかなり強い表現です。しかしここでヨブは、「自分の目と契約を結んだ」という言葉を使っています。元々「契約」というのは、「断ち切る」という意味があり、かつて神がアブラハムと契約を結ばれる時に、家畜を真っ二つに裂いて、その間を神が通られたというものでした。契約を破れば、このようになるという意味です。そのような強い言葉をヨブはここで使っています。

ちなみに、「Covenant Eyes」というインターネット・フィルタリングのソフトがあります。そのまま「契約の目」という意味です。フィルタリングだけが機能ではありません。自分が訪ねたサイトのまとめが、信頼する人に送信されるという仕組みになっており、自分の性的純潔を守るためのアカウントビリティの関係を守るためのツールです。

そして午前礼拝で学んだように、ヨブは、乙女を、情欲をもって見ていたのであれば、それにふさわしい災難が降りかかっても構わないと言っています。それだけ、このことについての良心が保たれている証拠です。

31:5 もし私がうそとともに歩み、この足が欺きに急いだのなら、31:6 正しいはかりで私を量るがよい。そうすれば神に私の潔白がわかるだろう。

彼は、嘘について神の前で、正義に量られてもよいとしました。嘘について私たちは軽々しく考えでしまいます。しかし、「嘘は泥棒の始まり」という諺があるのですが、嘘の初めは悪魔でありました。彼は偽りの父と呼ばれており、私たちが嘘を付くたびにそれは悪魔に感化されたものであることを知る必要があります。

31:7 もし、私の歩みが道からそれ、私の心が自分の目に従って歩み、私の手によごれがついて

いたなら、31:8 私が種を蒔いて他の人が食べるがよい。私の作物は根こぎにされるがよい。

これは貪りであります。目から見えるものに対して、貪って、それを自分の手に入れているのであれば、たちまち自分の畑の収穫が他人に食べられてしまって良いと言っています。自分が貪ったのだから、その貪りの被害に遭って当然であるということです。

31:9 もしも、私の心が女に惑わされ、隣人の門で待ち伏せしたことがあったなら、31:10 私の妻が他人のために粉をひいてもよい。また、他人が彼女と寝てもよい。31:11 これは恥ずべき行ない、裁判にかけて罰せられる罪だ。31:12 実に、それは滅びの淵まで焼き尽くす火だ。私の収穫をことごとく根こぎにする。

これは、姦淫のことです。「隣人の門で待ち伏せ」というのは、実際に他の男の女を捕まえて、その女と寝るといことです。ヨブはこのことに対して、かなり厳しい神の裁きがあることを伝えています。先ほどと同じように、自分が行なったことのその報いが自分に降りかかるだけでなく、裁判にかけて罰せられる罪であると言っています。日本でも昔は姦通罪がありました。モーセの律法では、姦通した者は死刑です。ヨブはさらに、これは滅びの淵まで焼き尽くす火であると言っています。ハデスにおいて火があることを、イエス様はラザロと金持ちの話で教えられました。

31:13 私のしもべや、はしためが、私と争ったとき、もし、私が彼らの言い分をないがしろにしたことがあるなら、31:14 神が立たれるとき、私はどうすればよいか。また、神がお調べになるとき、何と答えたらよいか。31:15 私を胎内で造られた方は、彼らをも造られたのではないか。私たちを母の胎内に形造られた方は、ただひとりではないか。

これは画期的なことです。族長時代は、アブラハムやイサク、ヤコブがそうであったように、そしてユダヤ人の歴史の中でそうであったように、奴隷は経済の中で一部となっていました。新約のローマ時代にもあります。しかし、ここでヨブは自分とその僕やはしためは、神によって造られた者として全く平等であると話しているのです。ですから、神への恐れをもってその訴えを聞くべきであると言っています。

パウロが同じことを、主人と奴隷との関係で話しました。「主人たちよ。あなたがたは、自分たちの主も天におられることを知っているのですから、奴隷に対して正義と公平を示しなさい。(コロサイ 4:1)」主人であっても、自分も天の主に対して僕であります。ですから、自分の僕と同じ立場なのです。ゆえに、恐れかしこんで、公平と正義を示さないといけません。

2C 寄る辺のない者 16-28

そして、六つ目です。16-23節までで、「寄る辺のない人々に対する助けの手」であります。31:16 もし、私が寄るべのない者の望みを退け、やもめの目を衰え果てさせ、31:17 私ひとりだけで食

物を食べて、みなしごにそれを食べさせなかったのなら、31:18 ・・私の若いときから、彼は私を父のようにして育ち、私は、母の胎にいたときから、彼女を導いた。・・31:19 もし、私が、着る物がなくて死にかかっている者や、身をおおう物を持っていない貧しい者を見たとき、31:20 彼の腰が私にあいさつをせず、私の子羊の毛でそれが暖められなかったのなら、31:21 あるいは、私を助ける者が門のところにいるのを見ながら、みなしごに向かって私の手を振り上げたことがあるなら、31:22 私の肩の骨が肩から落ち、私の腕がつけ根から折れてもよい。31:23 神からのわざわいは私をおびえさせ、その威厳のゆえに、私は何もすることができないからだ。

みなしごを振り払うようなことがあるならば、その場でその手と腕で肩から落ちるような裁きにあてよと言っています。これだけ、貧しい者、困窮している者たちに対する神の思いが、まるでご自分の瞳のように守らなければいけない存在であることを教えています。

奴隷にしても、孤児にしても、寡にしても、私たちの生きている現代社会では国の福祉制度で賄われています。福祉そのものがキリスト教から発生したものであり、キリスト教はもちろん旧約と新約の聖書に基づいているものです。ここで考えたいのは、どの時代もこのような寄るべのない社会を生み出さない理想はないということです。そこで、問題を政治家が悪いであるとか、体制が悪いであるとか、人に責任をなすりつけるのはキリスト者のすることではない、ということです。

イエス様は、社会体制を変えろと命じられませんでした。バプテスマのヨハネは、悔い改めなさいと説いた時に、下着を二枚持っている者は一枚も持たないものに分けなさい、と言いました。取税人に対して、その仕事をやめろとは言いませんでした。決められたもの以上は取り立てるな、と言ったのです。それから、兵士に対しては兵役をやめろとは言われませんでした。力づくで金をゆすったり、無実の者を責めてはいけないと教えました。社会の改革ではなく、その社会の中にいる人々を愛しなさいと命じたわけです。そして、国や政府に文句を言うのではなく、自分たちがどのように応答するのかを祈り、愛していくのです。

31:24 もし、私が金をおのれの頼みとし、黄金に向かって、私の抛り頼むもの、と言ったことがあるなら、31:25 あるいは、私の富が多いので喜び、私の手が多くの物を得たので、喜んだことがあるなら、31:26 あるいは、輝く日の光を見、照りながら動く月を見て、31:27 私の心がひそかに惑わされ、手をもって口づけを投げかけたことがあるなら、31:28 これもまた裁判にかけて罰せられる罪だ。私が上なる神を否んだためだ。

七つ目は、24-25 節にある「富の誘惑」であり、八つ目は 26-28 節にある「日や月を拝む」であります。富の誘惑と偶像礼拝が一对で語られていることは興味深いです。この二つは密接に関わっています。後に、イザヤがユダとエルサレムに金銀が満ちている時に、彼らがペリシテ人のト占をしていることを責めました(2:7)。富を愛する所に、他のいろいろなものを愛し、偶像にする誘惑があります。

富ですが、イエス様が警告されました。豊作になった金持ちが、「たましいよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」ただこれだけだったので。このような富への抛り頼みに対して、神は、「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。(ルカ 12:19-20)」と言われました。ヨブがあれだけの大富豪であったにも関わらず、彼はこの誘惑に陥らなかったというのはすごいことです。そして私たちが神を恐れて、自分に与えられているものは、いっさい自分のものではないことを知るべきです。主に任された財産であり、あくまでも管理者であります。

そして天体を拝むことについてですが、物の見事に日本では女性雑誌やネット、至るところに必ず星占いがあります。これも避けるべきものであることがここから分かります。

3C 敵に対する親切 29-40

31:29 あるいは、私を憎む者の衰えているのを私が見て喜び、彼にわざわいが下ったとき、喜び勇んだことがあるか。31:30 私は自分の口に罪を犯させなかった。のろって彼のいのちを求めようとしなかった。

九つ目は、「敵への憎しみ」についてであります。自分に悪を行なった者が災いに遭った時に喜んでほしくないということですが、これは敵を愛することに他なりません。そして、箴言の中にもはっきりとした教えがあります。「あなたの敵が倒れるとき、喜んでほしくない。彼がつまずくとき、あなたは心から楽しんでほしくない。主がそれを見て、御心を痛み、彼への怒りをやめられるといけなから。(箴言 24:17-18)」

31:31 いったい、私の天幕の人々で、「だれか、彼の肉に飽き足りなかった者はいないか。」と言わなかったことがあるか。31:32 異国人は外で夜を過ごさず、私は戸口を通りに向けてあけている。

第十の戒めは、「旅人の世話」であります。異邦人というのは、見知らぬ旅人ということです。天幕にいる使用人や奴隷はもちろんのこと、旅人がいつでも泊まれるようにしておきます。これはヘブル書 13 章 2 節にも書かれています。「旅人をもてなすことを忘れてはいけません。こうして、ある人々は御使いたちを、それとは知らずにもてなしました。」アブラハムが三人の旅人を招きましたが、実は御使いであったという話から、旅人は主が遣わされた者たちだということを教えています。

私たちは今、日本語学校をお借りしている身なのでこういうことはほとんど起こりませんが、もし教会の建物を持つならば、そこにホームレスの人々は来るでしょう。私たちがいたコスタメサの教会では、必ず事務所の奥に、食べ物が入った箱が置いてありました。そして、教会に確かに通っている人であれば優先的にそれを受け取ることができました。ただ利用するためだけに、食べるためではなくお酒のためにお金をもらおうとする人たちもいるので、多くの教会が現物支給であると

か、あるいは教会で少し奉仕をしてもらって、その対価として支払うという方法を取っています。知恵が必要なのですが、私たちはそのような人たちをもてなす用意をしておかなければいけません。

見知らぬ訪問客に対して、自分の予定が狂わされるとして邪魔だと考えてはならないことを思います。ちょうど良きサマリヤ人のような、自分の予定を邪魔するような存在に見えても、実はその人は神から遣わされてきた人であるかもしれないのです。

31:33 あるいは、私がアダムのように、自分のそむきの罪をおおい隠し、自分の咎を胸の中に秘めたことがあるか。31:34 私が群集の騒ぎにおびえ、一族のさげすみを恐れて黙り、門を出なかったことがあるか。

第十一の戒めは、罪の隠蔽についてです。興味深いことに、ヨブはすでにアダムのことを知っていました。モーセが創世記を書き記したのですが、その前に生きていたヨブは、口伝でしっかりと罪の始まりであるアダムのことを教えられていたのです。そして、そのアダムの特徴は罪隠しでありました。したがって、ヨブは何か自分に不都合なことがあると、それを隠したままにしておくことをしなかったのです。必ず門の外に出て、その罪の言い表しを公にしました。「自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。(箴言 28:13)」

そして第十二の戒めですが、それは 38 節以降にありまして、ヨブはここまで潔癖を主張したので大胆にも次の発言をします。

31:35 だれか私に聞いてくれる者はないものか。見よ。私を確認してくださる方、全能者が私に答えてくださる。私を訴える者が書いた告訴状があれば、31:36 私はそれを肩に負い、冠のように、それをこの身に結びつけ、31:37 私の歩みの数をこの方に告げ、君主のようにして近づきたい。

自分のこれまでの義の主張を、誰も聞いていないとしても、全能者であられる方が答えてくださるのは間違いないと断言しています。神に答えを求めています。そして、彼に悪を行なったという告訴状でもあれば、ここまで述べたように全く無罪を証明できるので、肩に背負って、冠のように結び付けて、全能者である方に王のようにして近づいても平気だ、と大胆に言っています。つまり、神が訴訟を起こされた方であり、自分は無実を晴らすことのできる被疑者だということです。

先に話したようにこの時点でヨブは、自分の義を神の前で主張し、神よりも自分が正しいとしました。彼は友人の反論がないので、自分の主張を余すところなく話すことができたのです。そこで次の章でエリフが怒るのです。神ではなく自分自身を、義としていくとは何事か？と怒ります。さらに、エリフの後に神ご自身が現われます。神も同じことを言われます。「自分を義とするために、わたしを罪に定めるのか。(40:8)」ということです。

これは先にお話したように、ヨブも友人と同じ過ちを犯したということです。正義のみを求め、追及したからです。神が慈しみ深い方で、ヨブをそのようにしておられることを知らずに、彼は正義と言う尺度のみで神との関係を考えていました。私たちも同じ過ちに陥りやしないでしょうか？ 苦しみというと、必ず自分がそれだけ悪いことをしているのかという、正しいのか悪いのかという問題にしてしまいます。そうではなく、苦しむ時は神が気にしておられる、神が愛しておられるという、神が共にいるという、そういう尺度で見ることも必要です。

31:38 もし、私の土地が私に向かって叫び、そのうねが共に泣くことがあるなら、31:39 あるいは、私が金を払わないでその産物を食べ、その持ち主のいのちを失わせたことがあるなら、31:40 小麦の代わりにいばらが生え、大麦の代わりに雑草がはびこるように。ヨブのことばは終わった。

最後、十二番目は「土地の搾取」であります。大地主でありましたから、自分のしたいようにそこから産物を食べることができました。また、その力を使って他の小さな地主から土地を奪い取ることも可能でした。しかし、主を恐れていたので彼はできませんでした。旧約時代には、自分に与えられた土地は神からのものであり、それをしっかり守らなければいけないという、イスラエルに対する教えがあります。けれども、その母体はこのようにヨブの中にも倫理観としてあったのです。

そして、「ヨブのことばは終わった。」とあります。ついに終わりました。ヨブが要求したように、神が現われて語られるのは、38章以降です。しかし、どこにいたのだらうと思うように、全く存在感を持っていなかったエリフという若者が32章から37章までという長さでもって語り始めます。これの語っていることは、次の神のヨブに対する語られることへの橋渡しのような役割を果たしています。